

辛珠柏編

『韓国近現代人文学の制度化：一九二〇～一九五九年』

신주백 편 『한국 근현대 인문학의 제도화 : 1910 ~ 1959』 혜안, 二〇一四年

松田利彦



韓国・朝鮮の近代史を掘り下げていくと日本近代史の水脈と否応なくぶつかる。そのことはこの分野にかかわった研究者は誰しも知るところだろう。韓国における近代的学問の形成をめぐる歴史もその例に洩れない。しかし、日本の影響のもとで自国の知識体系や高等教育システムが産みだされたことは、韓国の大学人・研究者にとって決して快い事実でないことも容易に想像がつく。たとえば、植民地期に創設された京城帝国大学（一九二六年開学。以下、京城帝大と略記）が現在のソウル大学校と相当の歴史的系譜関係をもつことは明らかだが、現在のソウル大学校の公式見解では京城帝大を前身とする見方は受け入れられていない¹⁾。

このようにある種のタブーとなってきた日本統治期朝鮮におけ

る近代的学問編成の問題は、近年、韓国・日本における京城帝大研究の進展にともない、次第にその重要性が認識されてきた。本書もまたそのような問題関心に応えようとした力作である。本書は、植民地期、人文科学諸分野においてどのように学問体系の分化が進んだか、そのもとで産みだされた京城帝大アカデミズムの学問内容が朝鮮人知識人の学術研究とどのような対照をなしたか、そしてそれらの影響が一九四五年の解放以後、いかに継続・変容していったかを幅広く論じている。以下、内容を見ていこう。

本書の第一部「植民地期近代的知識体系の制度化と人文学、そして『朝鮮学』」は五本の論文を収めるが、その狙いは、一本書の辛珠柏「近代的知識体系の制度化と植民地公共性」に明確に示さ

れている。同論文によれば、「伝統時代は一つだった経史子集の知識体系が、一九一〇年の主権喪失以後、研究と教育の対象たる朝鮮の歴史・文学・哲学という近代的知識体系に分化していく過程を解明」することが目的であり、「一九二六年に設立された京城帝大法文学部を通じて日本的かつ植民地的な文・史・哲の姿を整理し、朝鮮人が習得した分科学問〔ディシプリン―訳注〕としての文・史・哲との間にいかなる差異があったかを考察」とされている（二十一頁）。史学における申采浩、文学における安廓のような朝鮮人による朝鮮研究と、京城帝大法文学部の「朝鮮史」「朝鮮語学・朝鮮文学」講座を拠点とする日本人の朝鮮研究との「敵対的対立関係」を論じている。

続く李俊植「京城帝国大学『朝鮮語文学科』の言語学」、張信「京城帝国大学史学科の磁場」、辛珠柏「『朝鮮学』学術場の再構成」の三本の論文は、人文科学系諸分野において「朝鮮」が学問対象として定立され制度化される過程を描いている。李俊植論文は京城帝大の日本人言語学者の学問至上主義的な方法論が、学問至上主義の故に政治性を帯びていたことを指摘し興味深い。また、辛珠柏論文は、一九三〇年代に朝鮮を対象とした学問集団を、①「運動としての朝鮮学」、②考証学的朝鮮研究、③マルクス主義の立場からの現実批判、④「制度としての朝鮮学」に追随したものの、⑤「制度としての朝鮮学」（京城帝大）に分類し、この時期の学問

状況に大きな見取り図を与えている。

次に、鄭駿永「京城帝国大学『大学自治論』の特徴と解放後『大学像』の衝突」は、京城帝大において、「大学自治」は可能だったのかという問いを追究したものである。一九三〇年代の一期、自治が一応達成されたが、京城帝大の研究者は植民地社会の現実からは目を背けていたというのが同論文の結論である。既存研究においては植民地大学Ⅱ国策大学という見方が強い中、「大学自治」という側面を追究しようとした点が新鮮である。

第二部「解放後の大学における人文学の分科学問化、そして『国学』に移ろう。六編の論文がここには含まれる。植民地支配から解放された後、韓国では特に私立大学の増加によって大学数や朝鮮人教職員・学生数が急膨張するが、その制度と学術研究において脱植民地化がなし遂げられたかを問うている。まず、制度的側面では、鄭駿永「学科制（Academic Department）の導入と大学社会」が解放後韓国の大学において米国から導入された学科制を検討し、姜明淑「大学人文学の制度的基盤と学術条件」が「文理科大学」の設置、理事会による大学ガバナンスなどを検討する。いずれの論文も、諸大学の制度は、日本の旧帝国大学の影響を抜け出せず、解放後の制度改革は学問の質的発展や学問活動の自律的規律の形成をうながす基盤となりえなかった、と結論づけている。

ついで学術研究の側面から、辛珠柏「史学科の三分科体制と歴史学」と朴鐘隣「哲学科の設置と運用」が、それぞれ主要大学の史学科と哲学科について、その設置過程・教員構成・カリキュラムを検討している。史学科においては、日本の帝国大学の「国史・東洋史・西洋史」の区分が踏襲されていたこと、哲学科においてはソウル大学校と高麗大学校で西洋哲学と東洋哲学の比重に差があったことが指摘されている。ついで、李俊植「言語民族主義と『科学的』言語学——不安な同居から対立へ」は、解放後韓国における言語学者の潮流を、漢字非使用・ハングル専用を主張した民族主義的な周時経学派と科学的言語学を標榜した京城帝大朝鮮語文学科出身者に分け、両者の関係の推移を追う。米軍政期においては両者は共存していたが、次第に言語観の差異により対立が顕著になり、一九六〇年代、朴正熙政権期に大学アカデミズムを拠点とした科学的言語学一派が言語民族主義を圧倒していったと評価している。最後の板垣竜太「越北学者金壽卿の言語学の国際性と民族性」は、植民地期に京城帝大に学び解放後は朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の言語学を主導した言語学者・金壽卿の軌跡を跡づける。一九五〇年にソ連のスターリンが発表したマルクス主義言語理論の中心的な紹介者となった金壽卿が、やがて一九五八年のスターリン批判を契機とした北朝鮮の宗派闘争の中で批判される経緯には、この時期の北朝鮮における学問と政治の

関係の厳しさが凝縮されている。

以上のように、本書は、植民地期から解放後を包括的にとらえながら、主に大学を舞台として近代的学問分野がどのように編成されていたかを論じている。

植民地期を扱った第一部を通じてみると、京城帝大の学問研究の内在的分析よりも、それを朝鮮人研究者・卒業生との関係から描く外延的な視座が特徴的であろう。特に、学生・卒業生研究は、これまでの植民地大学研究において（親日派朝鮮人官僚育成という側面以外では）手薄な部分だったことを考えると、重要な成果だといえる。そして、このような考察を通じて、朝鮮人を含めた京城帝大出身者の学術研究とそれ以外の朝鮮学運動などの系列の学問とに競合関係が生じていたことが明らかにされている。日本における「帝国の学知」の研究が、ややもすれば日本帝国における日本人の知の研究に偏重してしまいがちな傾向に鑑みれば、そうした見方を相対化しうる視点としても意義深い²⁾。

さらに、そのような植民地期における学知の重層性が、解放後の学問研究にも深い影響を及ぼしていることも重要な論点である。第二部における李俊植論文は、言語学研究について、社会参与に禁欲的な京城帝大出身研究者とハングル運動を展開した民族主義的研究者との間に生じた対立が植民地期からの研究姿勢の差異に源を発するものだったことを明らかにしている。

とはいえ、植民地期と解放後の学知の継承と変容の問題には、なお掘り下げる余地があるだろう。とりわけ第二部は、第一部に比し、教員の出身校・経歴や各大学のカリキュラムなどの制度的分析が中心となってしまうことが惜しまれる。これらはデータとしては有用であるが、半面、(李俊植論文・板垣論文を除く)あまり学問内容に踏みこんでいないために、第一部で論じられた植民地地下における学知の競合状況との対応関係は見えにくくなっている。さらにこの点は、第一部と第二部の間の視角のずれをも招いているのではないか。すなわち、第一部では、大学における制度編成がディシプリンの形成と表裏一体になっているという視角が基盤にあつたのに対し、第二部では、むしろ大学の制度的基盤の整備と、研究者による内発的なディシプリンの形成とが乖離していたとのニュアンスが強調されているように感じる。全体としては比較的一貫した視角で貫かれている本論集であるが、植民地期と解放後を統一的に考察する枠組みにはさらなる検討が必要だろう。

また、そのためには、今後は、本書が扱った一九五〇年代末までの時期を超え、さらにその後の時期に韓国の大学制度や学知が植民地期の影響をどのように脱していくのかも論じられる必要がある。本書の設定した一九五〇年代半ばから同年代末という時期は、総じて制度的整備に学術研究の中身が追いついていない時

期と評価されている。それは、現代韓国における学問分野編成の確立過程を追うという本書の目的からするとやや物足りない評価だといわざるをえない。一九五〇年代が過渡期であつたとすれば、現代韓国における学問編成の確立はどの時期に求めるべきなのか。それを明らかにする作業は今後の課題として残されている。

大学制度と学問分野の定立の関係、植民地期と解放後の学術研究の通時的把握など、本書の提起した問題は、日本植民地帝国にとどまらない射程をもつ。本書が呼び水となつてさらなる研究が進むことを願う。

注

(1) 旧植民地大学の系譜を引く韓国・台湾の大学における大学史編纂および本文で以下言及する京城帝国大学についての研究史については、松田「植民地大学比較史研究の可能性と課題——京城帝国大学と台北帝国大学の比較を軸として」(酒井哲哉・松田編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房、二〇一四年)を参照されたい。

(2) 日本における代表的な研究成果として、酒井哲哉・杉山伸也ほか編『岩波講座「帝国」日本の学知』全八巻(岩波書店、二〇〇六年)。特に、京城帝大の日本人研究者が形成し「京城学派」を評価する視角が近年現れているが、こうした見方を相対化しつつ精緻化していくためにも、京城帝大の学問的営みとその外部の植民地社会における学知との関係を考察する本書の視角は重要だろう。石川健治「コスモス——京城学派公法学の光芒」(酒井哲哉編、前掲『岩波講座「帝国」日本の学知』第一巻)、全

京秀 「植民地の帝国大学における人類学的研究——京城帝国大学と台北帝国大学の比較」(岸本美緒編、同前、第三卷)、参照。